

2017年9月24日 「本当の奇跡」

「本当の奇跡」

ローマ人への手紙4章16節—25節

『16 このようなわけで、すべては信仰によるのである。それは恵みによるのであって、すべての子孫に、すなわち、律法に立つ者だけにではなく、アブラハムの信仰に従う者にも、この約束が保証されるのである。アブラハムは、神の前で、わたしたちすべての者の父であって、17「わたしは、あなたを立てて多くの国民の父とした」と書いてあるとおりである。彼はこの神、すなわち、死人を生かし、無から有を呼び出される神を信じたのである。18 彼は望み得ないのに、なおも望みつつ信じた。そのために「あなたの子孫はこうなるであろう」と言われているとおり、多くの国民の父となったのである。19 すなわち、およそ百歳となって、彼自身のからだが生きた状態であり、また、サラの胎が不妊であることを認めながらも、なお彼の信仰は弱らなかつた。20 彼は、神の約束を不信仰のゆえに疑うようなことはせず、かえって信仰によって強められ、栄光を神に帰し、21 神はその約束されたことを、また成就することができると確信した。22 だから、彼は義と認められたのである。23 しかし「義と認められた」と書いてあるのは、アブラハムのためだけでなく、24 わたしたちのためでもあって、わたしたちの主イエスを死人の中からよみがえらせたかたを信じるわたしたちも、義と認められるのである。25 主は、わたしたちの罪過のために死に渡され、わたしたちが義とされるために、よみがえらされたのである』（ローマ4章16節—25節）。

世の中には私達には理解できない、分からない事がたくさんあります。その中でも特に私達には知りえないことが、今日の箇所には二つ書かれています。すなわち、17節にあるように「死人を生かす」ということと「無から有を呼び出す」ということです。

孔子は「未だ生を知らず、焉んぞ死を知らん」と言いました。私達は生きるとはどういうことなのか、どこから命を受けたのか、それらを知らないのに、どうして、死ぬということを知ることなどできようかというのです。ましてや死んだ者が生かされるなんてことは私達には到底、理解しえないことなのです。さらに私達が知りえない極めつけはこの世界（宇宙）の始まりであります。すなわち、無から有が生まれるということはどういうことなのか、その答えを私達は持っていません。世界の始まりについては色々な説がありますが、それらはあくまでも憶測にすぎません。

2017年9月24日「本当の奇跡」

ここには「アブラハムは死人を生きし、無から有を呼び出される神を信じた」と書かれています。私達はこのようなことを学校で学んだことはありませんし、これらのことに対する答えをもっていません。

たとえばもしこれがアブラハムは「高熱の子供の熱を下げ、一束の麦から三束の麦を生み出した神を信じた」ということでしたら、その程度のことならば神でなくともできるのです。しかし、ここで取り上げていることは「死人を生きし、無から有を生み出す」という人間には決してできないことであり、人知を超えたことなのです。そして、これらを可能にすることができる神をアブラハムは信じたというのです。

アブラハムがその歳75の時に住みなれた国を出て、その妻サラと共に神の言葉に従ったということ为先々週、お話ししました。その時、神がアブラハムに言われた約束は「わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう」（創世記12章2節）というものでありました。そして、その旅の道中で再び神は彼に言われました「わたしはあなたの子孫にこの地を与えます」（創世記12書7節）。

この「あなたは祝福の基となる」「あなたの子孫にこの地を与えます」という約束は明らかにアブラハムと妻サラに子供が与えられ、その孫が与えられ、さらにその子孫が増えていき、それはやがて大いなる国民となるという約束でした。しかし、現実はと言いますと、それまでの彼らの人生には子供は一人もなく、彼らはすでに到底、子を宿すことができないほどに年老いていたのです。

アブラハム夫妻が神の言葉に従い、故郷を離れて長い年月が経ちました。しかし、待てども暮らせども彼らに子供が与えられるというような兆候はありません。もちろん、そのようなことは常識的、医学的に考えたら到底考えられないことでもあります。彼らには新しい命を宿すという身体的機能はもはやないのです。

そこでこの夫婦の心にある思いが沸いてきました。それは、彼らに仕えていたエジプトの女ハガルによってアブラハムの子を宿すということでありまして、実際に彼らはその自らの計画を実行したのです。それは明らかに神様が約束されたことではありませんでした。神様はアブラハムとその妻サラとの間に生まれる子により、彼らの子孫が増えるという約束をしていたのですから。

やがてハガルはアブラハムの子として男の子、イシマエルを産みました。それは、アブラハム夫妻が故郷を離れて11年後のことでした。このハガルとイシマエルの誕生について記している創世記16章はこんな言葉で終わっています「ハガルがイシマエルをアブラハムに産んだ時、アブラハムは86歳であった」（創世記16章16節）。そして、次の17章はこんな言葉で始まっています「アブラハムの99歳の時・・・」（創世記17章1節）。

2017年9月24日「本当の奇跡」

すなわち、彼らが神様との約束を待ちきれず、信じられず、ハガルによってイシマエルを得てから13年もの間、アブラハムと神様との間には聖書に書き記すべき交わりが絶えたということになります。まさしく、その間、アブラハムにとりまして神という存在は心から失われていたのかもしれませんが。

この13年の間、アブラハム夫妻の心にはどんなな思いがめぐったことでしょうか。イシマエルが生まれた時、アブラハムはもう既に86歳、サラも76歳。もはやどう考えてもこの二人の間に子供が生まれるということはありません。

何度となくアブラハムは「神は確かに私が75歳の時に、私の子孫は星の数のようにになると言われた。あれは本当だったのだろうか。私の聞き間違えではないのか。もう既に私はハガルとの間にイシマエルをもうけたのだ。イシマエルこそ神が言っていた子なのではないか。いいや、でも、あれはサラと自分の考えでなしたことであり、サラの子ではない。しかし、もはやこんな老体の自分達に子が与えられるというようなことはなかるう。もうこんなことに期待したり、考えることはやめよう・・・」。彼らの13年はそんな年月であったに違いありません。

しかし、神様はかつて交わされた約束を無効にすることはなさりませんでした。アブラハムが99歳、サラが90歳になった時に、すなわち、彼らの肉体的な機能がもはや働いていない、止まってしまったと思われる時、彼らの神に対する信仰すらも失いかけている時に、神様はアブラハムに再び現れて言われたのです。

「わたしは全能の神である。あなたは私の前に歩み、全き者であれ。わたしはあなたと契約を結び、大いにあなたの子孫を増すであろう」（創世記17章1-2）。

アブラハムはこの言葉を聞き、そして、その場にひれ伏したと聖書は記しています。そして、彼らは翌年、実にその約束どおりに男の子、イサクを授かるのです。

今日読みましたこのローマ書に書かれていますアブラハムについての言及を見ますと、彼は何の疑いもなく、常に完全な神への信仰によって歩んできたように思えます。しかし、アブラハムにも今、お話したような紆余曲折があったのです。しかし、そのような中にありながら、最終的には彼は「望み得ないのに、なおも望みつつ信じた」（ローマ4章18節）のです。

私達はこれらの物語を読む時に思うのです。こんなことはあり得ない。90歳の妻と100歳にもなる夫の間に男の子がどうして生まれようか。そんなこと今だかつて聞いた事がない。確かにそうです、皆さん、想像して下さい。90歳を超える方のお腹が日毎に大きくなり、やがて出産する。自分のためのウォーカーとベビーが眠るストローラーを押しながら、ダイパーを買う夫妻。敬老会に乳飲み子同伴で出席するご夫妻。もしこんなご夫妻がいたら今日、テレビ局がこの教

2017年9月24日「本当の奇跡」

会にやってきて「敬老会にベイビーと共に出席しているご夫妻」の映像が世界中に流れ、「私達は未だかつてこのような光景を見たことはありません。これは奇跡です！」というニュースを発信することでしょう。

まさしくアブラハムとサラに神様がなされたことは「死人を生かし、無から有を呼び出される」（ローマ4章17節）ことであり、それは私達にとりまして神がなされた奇しき奇跡以外のなにものでもありません。

時々、きかれます。「聖書の中の奇跡さえなければ、この聖書は教訓に満ちていて素晴らしいと思うのですが・・・。奇跡の記事にきますと心が冷めてしまうのですよ」。そう、聖書の中には確かにこのような奇跡がたくさん記録されています。その筆頭にはイエスの母、マリアの処女降誕、またイエス・キリストの復活があり、多くの人たちはこのことから先に進めないでいますでしょう。

しかし、よくよく考えますと、私達が手にしている聖書とはそもそも「神」について書いている書物なのですから、当然、私達には知りえないことが当然、書かれているのです。13年の沈黙を破って神様は開口一番、アブラハムに何を言われましたか。そうです、神は彼に言われたのです『わたしは全能の神である』（創世記17章1節）。

聖書に書かれていることで、およそ信じられない事、そんなことがおこるはずがないと思われるようなことで、もしその先に進めないという方がおりましたら、まさしくこの一言がそのこと対するととてもシンプルで力強い答えとなります。そう、神は全能の神なのです。

その時にアブラハムとサラの体内ではこんな働きがあって、このようにして新しい生命が生まれたのだというような説明はまさしく、この一言に全て含まれているのです。そもそも聖書が全能の神について書いてある本であるのなら、私達が理解のおよばないことが何一つ書かれていないことのほうがおかしいのです。きわめて微量の限られた能力しかない我々の理解がおよばない全能の神の存在を否定することは私達にはできないのです。

もし私が取っ手が壊れたコーヒーカップをグルーで直したら、皆さんは「なんといい奇跡！」と言いますか。いいえ、決して言わないでしょう。でも、もし切り落とされた耳を拾い上げ、それをその人の耳にその場で元のようにつけ直したら、それを私達は奇跡と呼びますでしょう。そう、このことはイエス・キリストが実際にゲッセマネの園でなされたことです。

大騒ぎしている子供達を大声で叱り、子供達が静粛になったら、それを奇跡と呼びますか。いいえ、でももし、嵐によって荒れ狂う湖を「静まれ」という一言と

2017年9月24日「本当の奇跡」

共に静めたら私達はそれは奇跡だと言いますでしょう。そう、このこともイエス・キリストがガリラヤ湖でなされたことです。

私達はこのような癒し、自然界への超人的な介入を驚き怪しみ、それは奇跡だと言います。しかし、どうぞお心におとめください、神の側からいえば、それは奇跡ではありません。そうです、神の側では、それは切り落とされた耳を瞬時に癒すことは私達がカップを直すようなこと、嵐を静めることも子供を静粛にするようなことであり、それらは神の目には全く奇跡ではないのです。しかしなぜ、私達がそれらを奇跡と呼ぶのかというと、それは私達の人知を超えたことであり、人間の力をはるかに凌駕している出来事だからです。しかし、それは明らかに神の能力を超えたものではなく、神にとってこれらのことはたやすく、当たり前になすことができることなのです。

以前にもお話ししたことがあります、新約聖書の中には取税人マタイが書いた「マタイによる福音書」に隠されているカラクリについてお話して終わりたいと思います。その書の8章、9章にマタイはイエス様がなされたことが連続して記録されています。

- ① 「らい病人のきよめ」 (8章1節-4節)
- ② 「中風の僕のいやし」 (8章5節-13節)
- ③ 「ペテロの姑の熱病のいやしと悪霊からの解放」 (8章14節-17節)
- ④ 「嵐が静められた奇跡」 (8章23節-27節)
- ⑤ 「汚れた霊につかれた人々から悪霊が追い出されたこと」 (8章28節-34節)
- ⑥ 「床の上に寝かされて運ばれた中風の者のいやし」 (9章1節-8節)
- ⑦ 「12年間、長血をわずらった女のいやし」 (9章20節-22節)
- ⑧ 「会堂司の娘が死からよみがえったこと」 (9章18節-26節)
- ⑨ 「ふたりの盲人がいやされたこと」 (9章27節-31節)
- ⑩ 「悪霊につかれたおしのいやし」 (9章32節-34節)

ここに記されていることは「肉体の癒し」、「悪霊からの解放」、「嵐を静めたということ」、「死からの復活」ということで、言うまでもなくこれらを私達は奇跡と呼びます。そう、それは私達には文句なしの奇跡です。しかし、先ほど申し上げましたように私達はこれらを「奇跡だ!」と言いますが、全能の神の側から見れば、これらは奇跡ではないのです。これらのことは私達が本のページをめくるように、腕に時計をはめるように神にはたやすいことなのです。

しかしながら今、お話ししましたマタイ伝に記されていることは私達にとりましてはどう考えても「奇跡」ですので、人間の側から見て、ここではこれらのことをイエス・キリストがなされた10の奇跡と呼びましょう。

2017年9月24日「本当の奇跡」

さて、実はここには11の奇跡が書かれているという学者がおります。彼はその奇跡をマタイは意図的に書いたというのです。しかし、どうみてもここには10の奇跡しかありません。しかし、注意深く、このマタイ8章、9章を読みますと一つ気になる記事があるといいます。それは6番目の奇跡である「床の上に寝かされて運ばれた中風の者のいやし」（9章1節－8節）と7番目に書かれている「12年間、長血をわずらった女のいやし」（9章20節－22節）の間にあります。その学者はこれらの奇跡の間にはさまれているこのことも奇跡なのだということです。しかもそれは七番目の奇跡なのです。七という数字は聖書の中では完全数ですから、それはさぞかしスゴイ奇跡なのでしょう。私達はそんなすごい奇跡を読み過ぎてしまったのでしょうか。さあ、それではこれらの奇跡の間に書かれている七番目のこととは何なのでしょう。マタイ9章9節－13節にはこう書かれています。

⑨さてイエスはそこから進んで行かれ、マタイという人が収税所にすわっているのを見て、「わたしに従ってきなさい」と言われた。すると彼は立ちあがって、イエスに従った。⑩それから、イエスが家で食事の席についておられた時のことである。多くの取税人や罪人たちがきて、イエスや弟子たちと共にその席に着いていた。⑪パリサイ人たちはこれを見て、弟子たちに言った、「なぜ、あなたがたの先生は、取税人や罪人などと食事を共にするのか」。⑫イエスはこれを見て言われた、「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。⑬『わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、学んできなさい。わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」。

このマタイによる福音書を書きましたイエスの12弟子の一人であるマタイはここで自らのことを書き残しています。そう、自分がかつては取税人であったと。彼の仕事はかつてユダヤ社会を支配していたローマ帝国の元で、その帝国のために税金を徴収することでした。彼は同胞から重税を厳しく取り立てて、それを自分達を支配する帝国に納めていました。そして、それだけではなく、税金にプラス・アルファつけ加えて自分達のポケットマネーを得ていました。故にユダヤ人の間でこの取税人ほどに嫌われていた職業はありません。彼らは同胞から「この罪人め！」とあからさまに呼ばれていたのです。

マタイとて人間、自分がしていることは分かっていたでしょう。彼に本当の友と呼ばれる人達などはいなかっただろうということは容易に想像できます。それこそ、自分は見た目は生きているけれど、その魂は虚しさであふれ、死んでいるのも同然、普通の人達より裕福だけれど、自分の心は空っぽであるということ、それを誰よりも知っていたのはマタイ自身だったと思います。まさしく、彼もアブラハムのようにその心は死んでいたのです。マタイはそのことを知っていました。

2017年9月24日「本当の奇跡」

しかし、そのマタイにイエスが声をかけられました。「わたしに従ってきなさい」という言葉に彼は立ちあり、イエスに従ったのです。それが彼の新しい人生の始まりとなりました。こうして死んでいた自分がイエスにあって生かされていくことを知りました。新しく生まれたことを知りました。何もなかった心に命の泉が沸きだしたことを知りました。まさしくマタイは死んでいたような自分を生からしめ、空っぽであった無の心から有を呼び出される神と出会ったのです。

そんな彼はこのマタイによる福音書を書き記すにあたり、かつて自分の人生に起きたこの出来事を「中風の者の癒し」と「長血を患った女の癒し」という奇跡の間においたのです。そう、彼にとりまして「その出来事」はもはや「出来事」なのではなく、奇跡であったということを確認し、しかも、他の諸々の奇跡の中でそれをあえて7番目に書き入れたのです。ユダヤ人にとって7は完全を意味する数です。すなわち、このことはこれらの奇跡の中で「私がキリストにあって命が与えられ、希望が与えられた、そして義と認められた」ということこそが、奇跡中の奇跡なのだともマタイはここで書いているのです。

そして、このことをパウロは今日、開かれています23節以降にも記しているのです。23しかし「義と認められた」と書いてあるのは、アブラハムのためだけではなく、24わたしたちのためでもあって、わたしたちの主イエスを死人の中からよみがえらせたかたを信じるわたしたちも、義と認められるのである。25主は、わたしたちの罪過のために死に渡され、わたしたちが義とされるために、よみがえらされたのである（ローマ4章23節-25節）。

ここに「これらの事はアブラハムのためだけではなく」と書かれているように、これらのことは「取税人マタイのうちにも起こったこと」であり、驚くべきことに、それは「私達のうちにも起こり得ること」だということです。

ここで皆さん、一つのことに気がつき始めているのではないかと思うのです。先ほどお話ししましたようにマタイが記しました「肉体の癒し」、「悪霊からの解放」、「嵐を静めたということ」、「死からの復活」は私達にとりましては奇跡ですが、神にとりましてはそれは奇跡と呼ぶようなものではありません。

でも、マタイがイエスと出会い、回心したということはいかがですか？この出来事と先の10の出来事とは何が異なりますか。そう、先の出来事は100パーセント神の介入によってなされました。しかし、マタイの回心に関して言えば、それは神のご介入と共に、マタイに与えられている自由意思によるリスパンスによってなされたことなのです。すなわち、神の側にとりまして、他の諸々のことは奇跡ではなくとも、このマタイの回心はまさしく神すらも奇跡と呼ぶことなのです。

ここにきて私達はあの記録に合点がいくのです。聖書の中で一人の人が罪を悔い改めて神と共に生きようとする時に天では何が起きていると記していますか。イ

2017年9月24日「本当の奇跡」

イエスは言われたではありませんか「よく聞きなさい。それと同じように、罪人がひとりでも悔い改めるなら、神の御使たちの前でよろこびがあるであろう」（ルカ15章10節）。天において神の御使い達の間には喜びの歓声があがるということ、このようなことはイエスが度々、人の病を癒された時、死人をよみがえらせたとき、嵐を静めたような時には一度も言及されていません。そうです、何度も申し上げますが、それらのことは神の側にとりまして、すなわちその傍におります御使いにとりまして当たり前のことであり、喜びがあがるようなことではないのです。しかし、一人の罪人が悔い改めるのなら、そう、あなたがあの日、あの時、主のもとに立ち返った時、否、もし今日、この主を心に信じ受け入れる方がおりますのなら、驚くなかれ！、天では御使い達が歓声をあげたのです。なぜですか、それこそが本当の奇跡だからです。

今朝、皆さんがこの教会にいらっしゃっていること、それは私達の目には奇跡として映りません。しかし、もしこの中で今日、自ら悔い改め、神を信じてこれからの人生を神と共に歩んでいこうという決意をその心になされた方がおりましたら、それは奇跡なのです。あなたの隣に座わっている人はそれに気がつかないかもしれない。しかし、天においては万軍の御使いが固唾をのんでそれを見守っており、そこに歓声が起きているのです。

先日もある方と話しておりましてなるほどと思いました。この世で一番、固いものは何でしょうか。ダイヤモンドでしょうか。いいえ、それは私達の心です。私達の心は頑なで固いのです。すべての事を自分の頭で理解しようとし、理解できないことはありえないものとして脇に置く。いつも自分が願っている通りになることばかりを求め、何か問題があればいつもその責任を転嫁する人を探す。そのような閉ざされた心に神は常に語りかけています。しかし、私達はその神の言葉に聞き、その心に神を迎え入れることがありません。しかし、ある時、ふと我にかえり、神と向き合い、神に立ち返る。そう、一人の罪人が神に立ち返るためには神の側のアプローチと私達の側の応答（レスポンス）が必要なのです。このように我々のレスポンスがそこには不可欠でありますゆえに、そのことが成されるということこそが本当の奇跡なのです。

人生を諦め、肉体的にも力を失っているようなアブラハム、それなりの財産はありながら、しかし本当の意味で与えられている命に生きてはいなかったマタイ、彼らはその神のはたらきに信仰をもって応えて、自ら立ち上がりました。そして神様はこれらの者達を生かされ、その死の状態から彼らを救われました。虚無に支配されていた彼らの心に、確かな希望が生まれました。そして、それは私たちの人生にも起きるのです。主イエス・キリストを死人の内からよみがえらせた方を信じる私達も、死から命へと移らされるのです。今日も、明日もこの奇跡がこの教会で、また世界のいたるところで起きることを心から祈ります。お祈りしましょう。